

# 上の台遺跡

長野県佐久市瀬戸上の台遺跡発掘調査報告書

昭和59年3月

長野県佐久市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、昭和57年10月7日～同年10月22日にわたって発掘調査された、長野県佐久市大字瀬戸2816他に所在する上の台遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、佐久市平賀地区圍場整備事業に係る緊急発掘調査であり、東信土地改良事務所の委託を受けて佐久市教育委員会が実施し、農家負担分については国庫補助事業である。
- 3 本調査は、林幸彦を発掘担当者とし、佐久考古学会員有志を調査員とし、瀬戸・穂村地区を中心とした地元の方々の協力を得て実施した。
- 4 遺構実測図作成は調査員・調査補助員が行い、土器の実測及び拓本は三石宗一・井出百合子が、石器の実測は掛川祐次が行った。トレスは島田恵子・大井和子が行った。
- 5 本書に掲載した写真は、小山岳夫・林が撮影したものをを使用した。
- 6 本書の執筆は、II章の1を白倉盛男が、他は島田と林があたった。
- 7 本書の編集は、林が行った。
- 8 本遺跡に関する資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

調査に際しては、長野県教育委員会文化課指導主事臼田武正先生に御指導をいただいた。

また、報告書作成及び整理作業にあたって、長野県教育委員会文化課指導主事郷道哲章先生、佐久市文化財審議会委員小須田盛風先生には適切な御助言・御指導をいただいた。ここに御芳名を記し、厚く御礼申し上げる。

## 凡 例

- 1 各遺構の略号は、次のとおりである。  
Y—弥生時代住居址、D—土壇、M—溝状遺構
- 2 遺構実測図の縮尺は、次のとおりである。  
住居址・土壇—1/80、溝状遺構—1/40
- 3 遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。  
土器・石器— $\frac{1}{2}$
- 4 図版中遺物の縮尺はすべて約 $\frac{1}{2}$ である。
- 5 水系レベルの原点は、標高675.72mである。

## 本文目次

例 言	
凡 例	
本文目次	
付表目次	
挿図目次	
図版目次	
I 発掘調査の経緯	1
1 調査に至る動機	1
2 発掘調査の概要	1
3 発掘調査日誌	2
II 遺跡の位置と環境	5
1 上の台遺跡付近の自然環境	5
2 上の台遺跡の歴史的環境	6
III 層 序	10
IV 遺構と遺物	12
1 Y1号住居址	12
2 Y2号住居址	17
3 D1号土壇	20
4 M1・M2号溝状遺構	23
V 総 括	24
引用参考文献	26

## 付表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	9
-------------	---

## 挿 図 目 次

第1図 上の台遺跡地形及び調査区域設定図	3
----------------------	---

第2図	周辺遺跡分布図	8
第3図	層序模式図	10
第4図	上の台遺跡検出遺構全体図	11
第5図	Y1号住居址実測図	12
第6図	Y1号住居址出土土器実測図	14
第7図	Y1号住居址出土土器拓影	15
第8図	Y1号住居址出土石器実測図	16
第9図	Y2号住居址実測図	17
第10図	Y2号住居址出土土器実測図	18
第11図	Y2号住居址出土土器拓影	19
第12図	M1号・M2号溝状遺構実測図	21
第13図	M1号溝状遺構出土土器実測図	23

## 図 版 目 次

図版一 上の台遺跡航空写真

図版二 1 上の台遺跡近景 2 Y1号住居址全景（北西から）

図版三 1 Y1号住居址全景（南東から） 2 Y1号住居址出土遺物

図版四 1 Y2号住居址全景（北西から） 2 Y2号住居址全景出土遺物

図版五 1 Y1号住居址出土土器 2 M1号溝状遺構全景（東から）

3 M1号溝状遺構全景（南から） 4 M2号溝状遺構全景（東から）

図版六 1 M2号溝状遺構全景（南から） 2 発掘調査団

## I 発掘調査の経緯

### 1 調査に至る動機

東信土地改良事務所による昭和57年度長野県営圃場整備事業（平賀地区）が進行する中、佐久市大字瀬戸字上の台において数名の地元市民により縄文時代～平安時代の土器片が多量に採集された。早速、佐久市教育委員会は、昭和57年9月19日付57佐教社第257号で遺跡の発見について県文化課へ通知するとともに、東信土地改良事務所へも通報した。さらに、東信土地改良事務所・県文化課・佐久市教育委員会の3者で現地協議の結果、圃場整備事業の進行を極力防げない日程により上の台遺跡の削平される部分についてのみ緊急発掘調査し記録保存することとなり、急ぎ、東信土地改良事務所から佐久市教育委員会に発掘調査が委託された。これを受けて佐久市教育委員会は、昭和57年10月7日より現地での調査を実施した。報告書作成等整理調査は次年度とした。

### 2 発掘調査の概要

- 遺跡名 上の台遺跡
- 所在地 長野県佐久市大字瀬戸2816番地
- 発掘調査期間 昭和57年10月7日～同年10月22日
- 調査に関する事務局の組織

#### <57年度調査>

教育次長 臼田幸作  
社会教育課長 土屋四郎  
" 係長 井出喜平  
" 係 堀内美喜男  
" 係 林 幸彦  
" 係  
社会教育指導員 茂木智里

#### <58年度調査>

大井昭二（58年10月退任） 森泉都太郎（58年11月就任）  
並木 進  
相澤幸男  
関本 功  
林 幸彦  
細萱健一（58年7月就任）  
森泉かよ子  
小山岳夫（58年7月就任）  
三村美穂子（58年12月就退任） 大井和子（59年1月就任）

- 調査団の構成組織 <57年度調査>

団 長 戸塚平一郎

担当者 林 幸彦

調査員 井上行雄、大井今朝太、小山岳夫、島田恵子、白倉盛男、三石延雄、森泉定勝

調査補助員 市来和子、佐々木宗昭、原田政信、茂木智里

協力者 市村はるひ、上原ミツ、大井恵美子、荻原つたえ、荻原ゆり子、小栗原三、工藤郷子、  
須藤久米子、須藤房子、篠原つる子、竹花邦子、田中穂波、並木ことみ、橋詰まゆみ、  
橋詰操、丸山勝子、牧野こと、柳沢松子、依田さき子

〈58年度調査〉

団 長 戸塚平一郎（教育長、58年10月退任） 大井昭二（教育長、58年11月就任）

担当者 林 幸彦

調査員 井上行雄、小山岳夫、島田恵子、白倉盛男、原田政信、三石宗一、森泉かよ子、

協力者 青木久恵、青木ひとみ、池田美智子、井出百合子、岩崎文子、大井和子、掛川祐次、  
木内亜友美、小林敏子、小林文江、並木ことみ、橋詰操、丸山勝子、三村美穂子、茂木智里

### 3 調査日誌

○昭和57年10月1日～7日（金～木）

近接して実施している樋村遺跡発掘調査の関係もあって、付近一帯の写真撮影及び地形図の補填をする。10月5日現地協議を東信土地改良事務所・長野県文化課・佐久市教育委員会の3者で行った。5日～7日は、器材の手入れや運搬等を行った。

○10月8日（金）曇り時々雨

重機によって耕作土を除去し、精査し遺構のプラン確認を行った。その結果、南北に伸びる溝状遺構を検出しM1号溝状遺構と命名した。

○10月9日（土）雨

溝のプラン確認

○10月10日（日）曇り時々雨

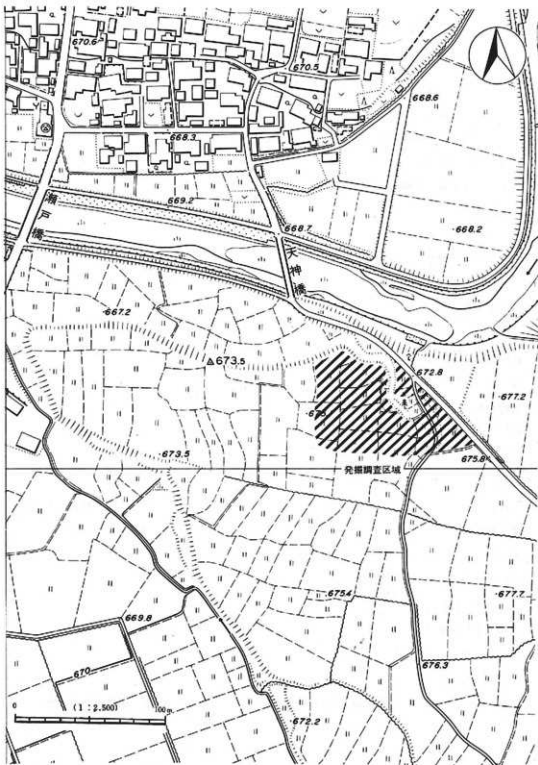
溝のプラン確認を行ったが、泥をこねるようなものでほとんど進まない。

○10月11日（月）曇り時々雨

引き続きM1号溝状遺構の検出作業をするものの土質が強粘土状で小石を多量に含んでいるためになかなかはかどらない。遺構の南側一部分を掘り始めた。

○10月12日（火）晴れ

調査区域の東側の耕作土を除き、遺構の検出作業を行った。新たな溝状遺構が検出され、M2



第1図 上の台遺跡地形及び発掘調査区域設定図

号溝状遺構と命名した。M1・M2号溝状遺構の覆土の掘り下げを行った。

○10月13日（水）晴れ

M1・2号溝状遺構の覆土を掘り下げた。

○10月14日（木）曇り

M1・M2号溝状遺構の覆土掘り下げ作業は、ほぼ溝底面に達した。同時に調査区東側に圍場整備に関する排水の溝に断面が露出していた2棟の住居址のプラン確認を行った。

○10月15日（金）曇り

M1・M2号溝状遺構の写真撮影し、土層面図及び平面図を作成した。Y1・2号住居址の平面図を作成した。

○10月18日（月）晴れ

Y1・2号住居址の土層断面及び住居址断面図を作成した。

○10月19日（火）曇り

Y1・2号住居址の写真撮影を行った。

○10月20日（水）晴れ

器材を撤収した。資料室にて図面の点検を行った。

○10月21日（木）晴れ

器材を整備した。現地にて図面の補足をした。

○10月22日（金）曇り

器材の整備をし、収納した。

昭和58年7月16日、18～23日、25、27～30日

埋蔵文化財資料室にて土器洗いをを行った。遺物に付着している土がたいへん粘質のために、非常に時間が費された。また、現地にて全体図の確認、周辺遺跡の詳細調査を行った。

○8月2日～6日、8日～10日、18日～23日

遺物の分類及び註記を行った。さらに、拓本の可能な土器片については、その作成をした。

○12月12日～17日

遺物の実測作業及び写真撮影を行った。各遺構の平面図と断面図の編集を行い、そのトレス作業を実施した。

○59年1月～3月

報告書の編集に際して、原稿執筆を分担し、割り付け、3月31日に報告書刊行となった。



## II 遺跡の位置と環境

### 1 上の台遺跡附近の自然環境（地形地質を中心として）

佐久平は標高平均700m、南北20km、東西最大10kmの長菱形の高原盆地で、その長い対角線にあたる中心部を千曲川が南から北に向かって貫流している。東部は関東山地の最西北端部の延長佐久山地が群馬、長野県境を作り、部分的には千曲川の流路近くまで迫っている部分もあり、その北部は妙義荒船佐久高原国定公園、南部は秩父多摩国立公園となって埼玉・山梨県境まで続いている。西側はホッサマグナ（日本中部地帯帯）中心部に噴出隆起した八ヶ岳立科火山群が南から北に聳え立ち諏訪郡界を形成し、ここも八ヶ岳中信高原国定公園となっている。北側は浅間火山を主峰とした上信火山帯が群馬県との境を作っており、これも上信越国定公園となっている。従って佐久平は千曲川が小泉上田方面に流出する西北部だけが明いているが他は何れも山地に囲まれ他地域へ出るには全て峠越しでなければならなかった。群馬側17、埼玉2、山梨6、諏訪郡6の大小の峠路があった。

全体的に南北に長い長菱形の佐久平は佐久市がその中心を占め、東西幅の最も広い部分にも当たっている。上の台遺跡はその中心部より東寄りに位置している。即ち千曲川右岸の田子川と内山川が合流した滑津川と香坂川を合せた志賀川がまた合流して千曲川に注ぐ複合扇状地上に位置しており、地形地質の上からは洪積末期の一時期には千曲川本流が離れ山の東を流れ、中込原台地にあたって西流して現在の滑津川北岸の断崖を形成したと考えられる。その時期には一時は上の台遺跡附近は千曲川本流の位置であったと考えられる証左もある。離れ山の溶結凝灰岩や滑津川北岸の浸蝕崖を詳細に観察すればそれらが理解される。

上の台附近の地層は今回は緊急発掘であって短期の調査であったため地層断面図を作る程の地下深くまでの調査は不能であったが住居址遺跡発掘の際の観察結果から見ると黒色表土は15cm内外と薄く、その下の茶褐色土層は30cm内外の厚さをもち河床円礫の直径2～10cmのものを多量に含み、それより下層は河床礫層から見られ旧千曲川或は支流の河床であった事が見られた。これは現滑津川の岸近い位置でもあり、近世になっても堤防の不完全な時代は豪雨洪水のたびごとにその被害が及んだ点も考え合せなければならない。

中込原台地を構成する洪積期上部湯川層の浸蝕崖以南の杉の木部落辺から東部の旧平賀村平担地地籍まで概観すると千曲川本流の複合扇状地、時には本支流の流路ともなり、本流の変化洪水の量によっては大游水池ともなり時には洪水の調整池沼沢状の土地でもあったものと考えられる。瀬戸耕地の基盤整備の際相当深い地下から埋れ木や草炭状のものが出たと言われた事や壱村

地籍の製瓦に適した微粒子良質粘土の厚層の成因などから類推される結論である。

## 2 上の台遺跡の歴史的環境

上の台遺跡は、志賀川が大きく蛇行して流路を東西に移し、田子川と合流して名称を滑津川に改める合流地点手前の段丘上に位置する。本遺跡は、圃場整備工事中に地元の柳沢謙、小林勇一両氏がブルドーザーで掘りかえた土の中から土器片を見つけ、遺跡であることが判明した新発見の遺跡である。

採集遺物の中には、縄文前期諸磯式、中期後半曾利式の土器が少量混入していたが、今回の圃場整備事業対象区からは縄文時代遺構は検出されなかった。一段上がった道上の東側水田地帯に集落の存在が想定される。この他、周辺の縄文時代遺跡は、南東側に隣接する樋村遺跡があげられる。この遺跡も圃場整備事業が行われ、昭和57年、58年の2年間にわたって発掘調査が実施されたが、弥生中期、後期の住居址、古墳時代の大集落址が検出され、縄文時代の遺構は皆無であった。過去の採集遺物は、現在の樋村地区の集落の中から、中期後半曾利式、後期加曾利B式の土器片、石鏃等が集中的に出土しており、おそらくこの地点に縄文時代の集落も存在していたものと考えられる。

志賀川を北東に溯った種畜牧場付近の両岸には、和田上遺跡、和田遺跡、蒲溝沢遺跡、中城峯遺跡、城遺跡等の縄文時代の遺跡が並列している。中でも和田上遺跡は、八幡一郎氏が「南佐久郡の考古学的調査」の中で「遺物の種類、数量に富む点に於ては、本郡の双壁ならん」と記述しておられるが、下島式、勝板式、加曾利E式、掘ノ内式、加曾利B式、石鏃、打製石斧、磨製石斧、敲、凹石、石棒、石皿、石匙、石鏟、滑石製垂玉等が出土している。以上の縄文時代遺跡は、志賀川の上流域およびその支川である香坂川上流域より西に下ってもかなり分布している。

この他に、市役所周辺の大家遺跡から、加曾利E式土器、打製石斧、凹石が採集されている。また、千曲川右岸の段丘太田部の久瀬遺跡から打製石斧、凹石が採集されているが、土器片が採集されないためいずれの時期に属するかは不明である。

弥生中期の遺跡は、昭和47年発掘調査され2棟の住居址を検出した深掘遺跡、昭和59年度調査の和田上南遺跡、57・58年度調査の樋村遺跡がある。和田上南遺跡は住居址3棟、樋村遺跡では5棟検出され、いずれも栗林式期に比定される。さらに、中期最末期の百瀬式土器が大家遺跡で採集されている。後期の遺跡分布は密度が濃くなり、瀬戸、平賀地区には、上の台遺跡、樋村遺跡、川原田遺跡、後家遺跡、後家山遺跡、西耕地遺跡、和田上遺跡、城遺跡、荒屋遺跡、荒神遺跡、中屋敷遺跡、久瀬遺跡があり、今回調査の上の台遺跡は2棟の住居址が検出され、樋村遺跡では16棟の住居址が検出され、いずれも吉田式中期にあたる。中込原には大家遺跡、平尾道遺跡、香屋前遺跡があり、この内、箱清水式期は久瀬遺跡、大家遺跡の2遺跡で、他は、耕作時

の表面採集での資料発見のため、詳細な編年区分はなされていない。

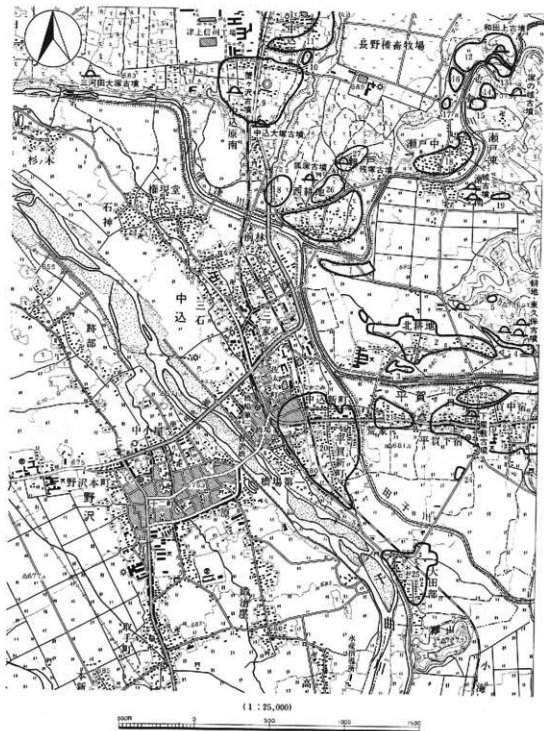
古墳時代の遺跡は、弥生時代の遺跡と重なり合うように分布し急増する。樋村遺跡の58年度調査区では、鬼高期～真間期の住居址288棟が検出された。過去の小規模な調査や踏査による採集では遺跡分布状況から、その集落構造等は推定の域にとどまっていたが、この調査により、佐久平における集落の在り方のいくつかを想定する資料が得られた。さらに、土器編年の細分化から調査例の少ない奈良時代の集落構造も、より明確化されるものと思う。弥生時代と複合せず、古墳時代より現する遺跡は、中城峯遺跡、和田上南遺跡、新町遺跡とわずか3遺跡を数えるのみで、他は、前述した弥生時代の主として後期の遺跡のありかたとほぼ重なる。

古墳は、樋村遺跡の東側山際、山間地丘陵に群を成している。城古墳、北耕地古墳、東久保古墳、後家山古墳、月崎・東姥石古墳があり、その内、後家山古墳は昭和49年発掘調査が行なわれた。墳丘径17.4mを計る円墳で、石室主体部は盗掘を受け破壊が著しく、石をとりのぞいた後再び埋めもどされてほとんど原形を留めない状況であった。鉄鏃、直刀片、刀子、土師器、須恵器、切子玉、管玉、ガラス小玉等が出土しており、周辺古墳群の中核的存在を示した古墳とされている。

また、志賀川右岸には、孤塚古墳、残塚古墳、蟹ヶ沢古墳、和田上古墳が分散して存在する。いずれも後期の円墳である。

平安時代の遺跡分布は、やはり弥生・古墳時代遺跡に重なり、佐久平では弥生～平安時代にわけて、3時代にわたり複合する遺跡が顕著である。平安時代から発生する遺跡は、中環遺跡があげられるのみであり。また、上の台遺跡には、第4図の全体図および第1図発掘調査区域図に図示したように、その昔、天神さんの境内だったと言われている場所に通称「のたれ松」とよばれる見事な枝ぶりの松が一本、今もその雄姿を誇っている。樹齢400年を数え、中世末期にまで遡る歴史をもった松である。

以上、上の台遺跡周辺の遺跡分布を概観してきたが、昭和57年・58年度に実施された佐久市遺跡詳細分布調査によって、範囲・時期等が明確にとらえられた。また、新町遺跡、荒神遺跡、番屋前遺跡のような大遺跡も発見されている。これ等新たに加わった遺跡も弥生～平安時代にわたる複合遺跡である。こうした佐久平の特質ともいえる複合遺跡は、近年の急速な開発によって調査例も増加し、土器編年の細分化もより可能な段階に入り地域的研究の貴重な資料提出となった。

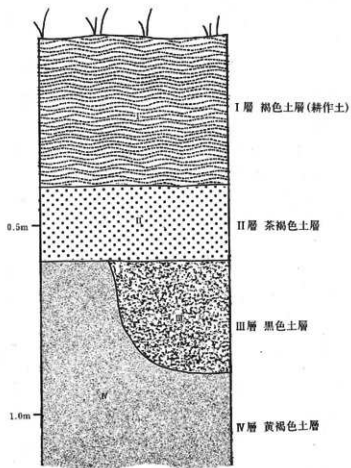


第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	縄	弥	古	歴	備 考
1	上の台	瀬戸字上の台	段丘	○	○	○	○	本調査
2	穂村	平賀字穂村他	＊	○	○	○	○	昭57年、58年発掘調査
3	川原田	平賀字川原田	＊	○	○	○	○	昭58年分布調査にて新発見
4	後家	平賀字後家他	＊	○	○	○		＊
5	後家山	平賀字後家山	台地	○				
6	後家山古墳	＊	丘陵			○		昭49年発掘調査
7	西耕地	瀬戸字西耕地	段丘	○	○	○	○	
8	深堀	中込字深堀	台地	○				昭47年発掘調査
9	大塚遺跡群	中込字大塚	＊	○	○	○	○	
10	平尾道	中込字平尾道	＊	○	○	○	○	
11	番屋前	中込字番屋前	＊	○	○	○	○	昭58年分布調査にて新発見
12	和田上	瀬戸字和田上	台地	○	○	○	○	
13	和田	瀬戸字和田	段丘	○				
14	菰蒲沢	瀬戸字菰蒲沢	丘陵上	○				
15	中城峯	瀬戸字中城峯	山腹	○		○	○	
16	和田上南	瀬戸字和田上	台地	○			○	昭54年発掘調査
17	数宮	瀬戸字数宮	段丘	○	○			
18	本郷	瀬戸字中屋敷	＊			○	○	
19	城	瀬戸字城他	＊	○	○	○	○	
20	新町	中込字新町他	微高地			○	○	昭58年分布調査にて新発見
21	荒屋	平賀字荒屋他	段丘	○	○	○		
22	荒神	平賀字荒神他	＊	○	○	○	○	昭58年分布調査にて新発見
23	中屋敷	平賀字中屋敷	＊	○	○	○	○	
24	中塚	平賀字中塚	微高地				○	昭58年分布調査にて新発見
25	久瀬浜	平賀字久瀬浜	段丘	○	○	○	○	昭58年分布調査にて版築道跡も含
26	東千石平	瀬戸字東千石平	台地	○			○	
27	八反田上	瀬戸字八反田上	＊				○	

### III 層 序



第3図 上の台遺跡層序模式図

上の台遺跡の北側には隣接して志賀川が流れており、遺跡との比高差は6mを測る。遺跡は、川から一段上った段丘上に立置し、北西に向ってゆるやかに傾斜している。

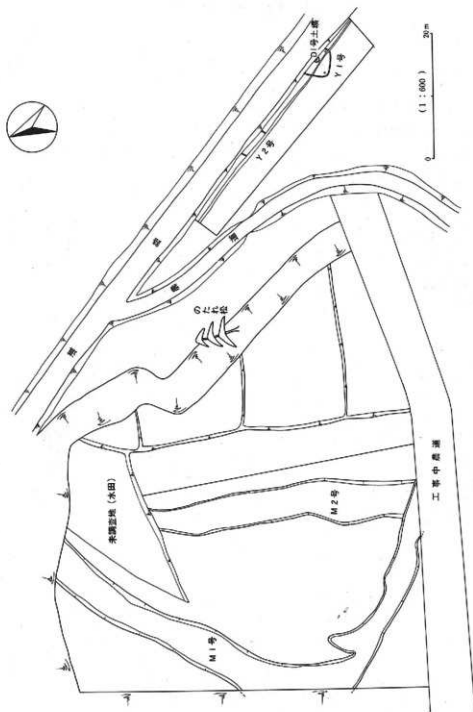
I層は、褐色を呈し耕作土で、微粒子状の強粘土層に多量の小石粒を多量に含み固く締っている。層厚は40cm前後である。

II層は、2cm~10cm大の礫と黄色土ブロックを多量に含む強粘土の茶褐色土層である。下部には水酸化鉄の赤褐色土を少量含み、層厚は20cmを測る。遺物は下部より多量に出土したが、保水性のある強粘土と礫と

に包含されて磨耗が著しい。

III層は、遺構覆土の黒色土層である。粒子は緻密であるが軟質で粘性もいくらか弱くなる。磨耗した遺物を多量に包含する。

IV層は、黄褐色を呈した地山である。保水性に富んだ強粘土層に2cm~10cm大の礫が多量に含まれている。

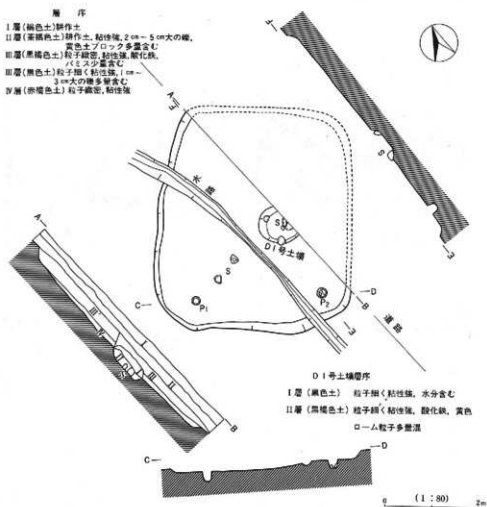


第4図 上の右邊排水出通線全体図

## IV 遺構と遺物

### 1 Y1号住居址(第5~8図、図版二の1、図版三の1・2)

本住居址は、圃場整備事業対象地の北東端道路沿いに検出された。すでに、圃場整備工事の排水溝によって表土や遺構覆土が削平されており、遺構の断面状況は道路際に明瞭にあらわれていた。北東壁が道路下に伸び、住居址は南西壁から住居中央にかけての三角形を呈した遺存状態で検出され、約 $\frac{1}{2}$ の範囲が調査された。



第5図 Y1号住居址実測図



平面プランは、南壁380cm、西壁450cmを測る。これ等明確に検出できた南西壁のプランから推測して、北壁330cm、東壁420cmを測り、やや北にすばまった隅丸長方形を呈する住居址であると推される。主軸方向は、N-24°-Eを示し、炉址はおそらく道路下にあると思われる。

壁高は、遺構確認面が凸凹に削り取られていたため一定しておらず、最高で18cmを測り、浅いところで5cmを測る。壁の立ち上りは、なだらかな傾斜をみせている。

覆土の観察は、道路沿いの断面がきわめて良好な状態で遺残しており、この部分で行なった。I・II層は耕作土で、25cm～40cmを測る。II層は、2cm～5cm大の礫・黄色土のブロックを多量に含んだ強粘土層である。III層には、水酸化鉄の赤褐色土が少量含まれており、この直下まで水田耕作土の床面土がおよんでいたものとおもわれる。覆土は、3層に大別され、掘り込みは断面図左側南壁コーナーはIII層からで、右側北西壁コーナーはIII層から行われている。III層は、住居址を切って掘り込まれたD1号土壌の北壁立ち上りを境に土層が明確に区分されており、右側を三層とし、左側をIII層とした。III層は黒褐色を呈し、粒子緻密で粘性強く、酸化鉄、バミスを少量含んでいる。III層は、1cm～3cm大の小礫を多量に含み、黒色が強いことがIII層とは異なる。III層は、赤褐色土層で礫の混入はなく、粒子の緻密な粘土層に覆われていた。

床面は、平坦ではあるが、礫を混入した粘土層を掘り込んであるため、小石粒が浮き出ておりややざらつき気味である。中央から東寄りの位置の床面は、D1号土壌により破壊されている。

ピットは、2個検出された。P<sub>1</sub>は、南西コーナーから40cm内側に位置し、18cm×18cm、深さ20cm、P<sub>2</sub>は、南西コーナーから45cm内側に存在し、20cm×20cm、深さ16cmを測り、左側に17cm大、右側に10cm大の安山岩がきっちり壁中に埋めこまれていた。柱を支えた礎である可能性が高い。

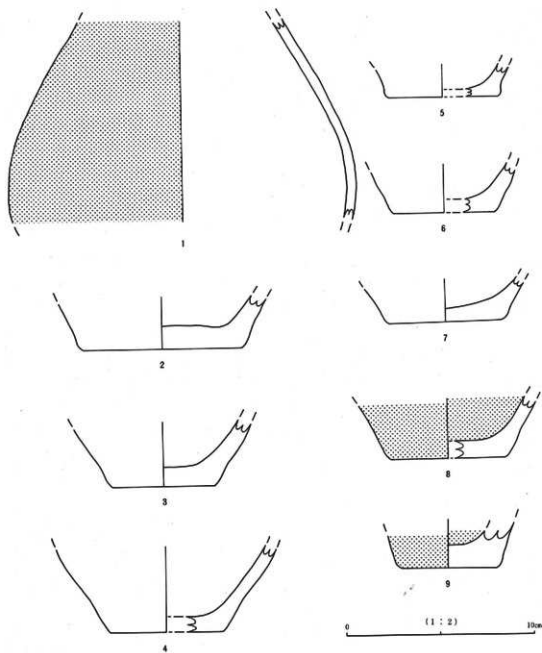
また、住居址を南北に切って排水溝が築かれている。巾10cm～30cm、深さ2cm～10cmを測り、床面を10cm程掘り込んではいるが、J2号住居址のようなカッティングは免れることができた。

出土遺物は弥生式土器、石器である。

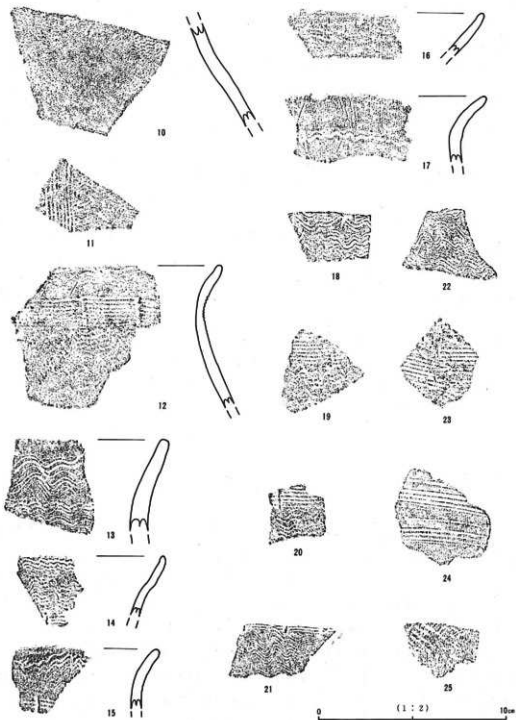
いずれも、強粘質の覆土内に包含されていたため土器の表裏面とも磨耗が著しく、文様などの観察は非常に困難な状態である。

図示し得た器種には、壺・甕・深鉢形土器があり、その他、高杯・杯形土器の小片も出土している。

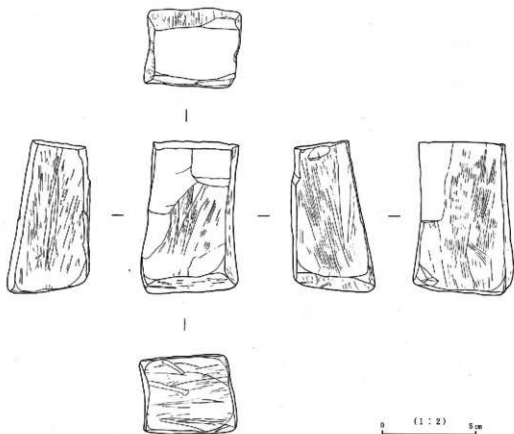
変形土器には、第6図1・2と第7図10の3点がある。2は内面の調整にまったくミガキがみられず、立ち上がり方に比して底径が大きく器肉が厚い点などから壺と判断した。1は胴部外面に赤色塗彩が施されているもので、最大径が胴部中央にくると思われる。弥生時代後期の箱清水式にみられる胴下部のくびれ部の後を持たず、胴部中央の張る無花果形を呈する器形となるものであろう。10は1と同様な器形と思われる。胴部上半の振幅及び波長の短い櫛描波状文は頸部ま



第6图 Y1号住居址出土土器实测图



第7图 Y1号住居址出土土器拓影



第8図 Y1号住居址出土石器実測図

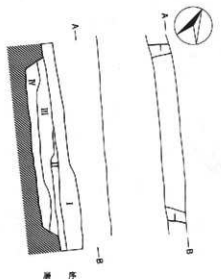
で続くものであろう。外面赤色塗彩されている。4～7は甕形土器の底部から胴下部片であり、いずれも外面には縦方向のミガキが施され、内面には横方向のミガキが施されている。12～17は口辺部片であって全体の器形は不明である。17は短い口辺部が外反し、張りの少い体部をもつ器形となろう。太めの2条の波状文が頸部に施されている。12は短く外反する口辺部をもち、体部が張る器形となろう。体部で最大径を測る。14の口縁部内湾気味に立ち上がる。他は小片のため明確な器形は知り得ない。甕形土器の文様はすべて櫛によって施文されている。波状文・簾状文・斜走文の3種類がみられる。波状文と斜走文との量的な比は波状文が圧倒的に多い。文様は、12・14・15が口辺部の波状文の後に頸部簾状文、13・19・20・23で頸部簾状文の後体部上半の波状文の順で施文される。斜走文は、23～25の3点にみられる。11は波状文の後に櫛描縦走平行線文が施されている。8、9は、体部内外面と底部内面に赤色塗彩されている深鉢形土器であり、底径6cm内外を測る中形のものである。

石器は、第8図の砥石が出土している。最大長8cm、同幅5cm、同厚4・2cmを測り、石質は砂岩である。表裏面はもとより両側面ともに使用痕が認められ、とくに、側面は、湾曲するほどによく使い込んでいる。

本住居址は、北東コーナーが道路下のため未調査部分として残り、炉址と主柱穴2が検出されなかったため全容は明らかでない。

出土遺物は、弥生時代後期の特徴をもったものが主体となるものの、壺の体部の特徴や一部の甕にみられる文様と器形の特徴は、中期後半の要素も兼ね有している。総じて弥生時代後期初頭の吉田式に比定される。

## 2 Y2号住居址 (第9～11図、図版四)



- 層序
- I層 (褐色土) 表土
  - II層 (茶褐色土) 粒子緻密、粘性強、2cm～10cm大の礫、黄色土ブロック多量含む
  - III層 (黒褐色土) 粒子細く粘性中、土器多く含む
  - IV層 (灰褐色土) 粒子緻密、粘性強、炭化粒子多量、2cm～5cm大の礫、黄色土ブロック少量含む

第9図 Y2号住居址実測図

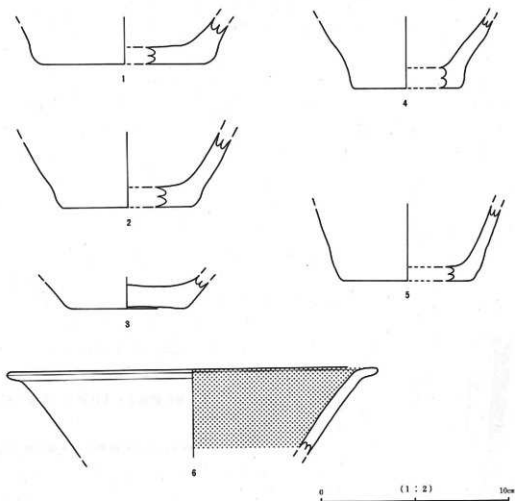
本住居址は、Y1号住居址から北に11m離れた位置にある。南壁及び北壁の一部分僅か45cm足らずを調査した。東側は既存の道路下に伸びており、西側は既存の水路と圃場整備工事の排水路によって壊されている。地形的に北側へ向かうにしたがい傾斜が強くなり、Y1号住居址より本住居址が破壊された結果となった。

平面規模は、検出部分から推測すると東西壁約275cmを測る小形の住居址となりそうである (Y1号住居址と同様に主軸がほぼ北をさすと仮定した場合)。

壁高は、地形的傾斜により、南壁30cm、北壁40cmを測り、なだらかに立ち上る。床面は平坦でやや堅緻な状態であった。

覆土は、Y1号住居址と同じく、道路沿いの良好な断面によって観察することができた。I層は、表土層で20cm～40cmの層厚をなし、II層は、茶褐色を呈し、黄色ブロックおよび2cm～10cm大の礫を多量に含む。この層は、北側にはみられず南側に10cm～14

cmの厚さで存在する。I、II層共に粒子の緻密な強粘土層が主体をなしている。覆土は、III、IV層の2層によって形成され、III層は、黒褐色を呈し、やや軟質で粘性も弱い。10cm～33cmの厚さで推積し土器を多量に出土する。IV層は灰褐色を呈し、粘性強く、炭化粒子を多量に含み、2cm



第10図 Y2号住居址出土土器実測図

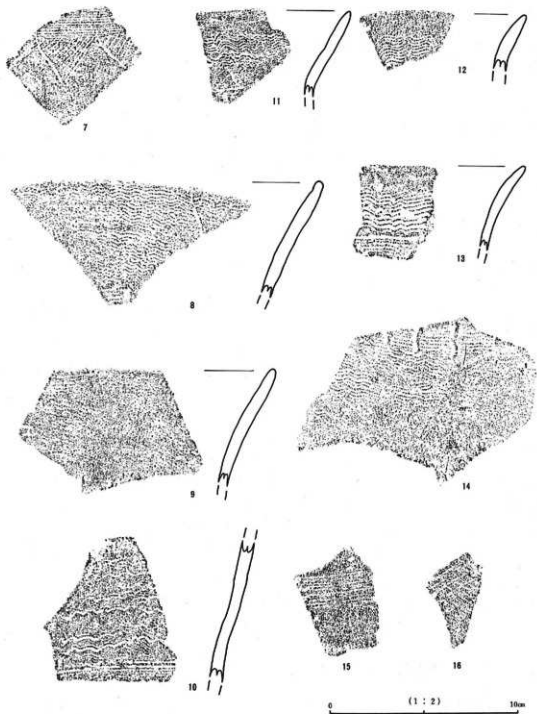
～5cm大の礫、黄色ブロックを多量に混入する。

この他、ビット、炉については、検出面積が少なく発見できなかったため、これ以上の言及には至らない。

なお、東側の道路下の部分は、Y1号住居址と同様に道路による破壊は、ほとんど免れていると思われる。

出土遺物は、弥生式土器で、壺・甕・高杯形土器が実測可能な破片であり、他に小片ながら杯形土器もみられた。

第10図1は、底径9cmを測り、内面はナゲ調整を行っており、胴下部の立ち上り方は壺形土器



第11图 Y 2号住居址出土土器拓影

のあり方である。第11図9は、変形土器の胴上部から頸部付近の小片であるが、柳描横走平行線文と篋描斜走平行短線文が充填された篋描鋸歯文が施文されている。施文は、横走平行線文の後鋸歯文が施されており、鋸歯文の方向は右から左つまり時計の針の進行方向の右回りである。2～5の調整は、器面の磨耗が著しいものの内面にミガキが認められる。さらに、この4点の底部からの立ち上がり方の特徴から変形土器と思われる。8～16もすべて変形土器の口辺部や胴片片である。8～13は口辺部で8・9の口縁部が内湾気味の他は、外反するものである。文様は、頸部の簾状文の他に、波状文と少数の斜走文がある。波状長文はほとんどが振幅の小さめなもので10は重複がなく帯状をしたものとなっている。文様の施文は、口辺部の波状文の後頸部の簾状文の順に施されている。6は、外面の赤色塗彩はほとんど磨耗のため認められないが、内外面に赤色塗彩された高杯形土器の杯部である。口縁部短く鋭く外反し、内面に稜をなす。

検出された住居址面積は、狭いものの出土遺物は豊富であった。これらの土器は、変形土器の文様に鋸歯文を持ち、さらに、変形土器に帯状を意識した丁寧な波状文がみられることなどから弥生時代後期初頭の吉田式に比定される。

### 3 D1号土壇（第5図、図版二の2、三の1）

本土壇は、Y1号住居址内の中央からやや東寄りの位置に検出された。床面を掘り下げて住居址内に構築されている。

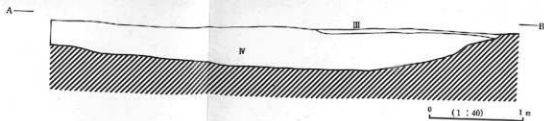
平面プランは、30cm×90cm、深さ19cmを測る楕円形を呈し、壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土は、黒色土を基調とした2層によって形成され、粒子の細い強粘土層が主体をなし、I層は水分が含まれており、II層は、酸化鉄および粘質黄色ローム粒子を多量に混入していた。覆土は盛あがった凸レンズ状の堆積をしており、住居址の付属施設でないことを示している。

壇内底面は平坦で、中に、16cmと10cmの安山岩2個が配され、さらに、南北の壁立ち上り際にも18cm・15cm大の安山岩が存在していたが、遺物の出土は皆無であり、本土壇の性格・時期は判然としない。しかし、時期については、覆土の堆積状態から推して、Y1号住居址廃絶後の間もない時期に構築されたものとおもわれる。

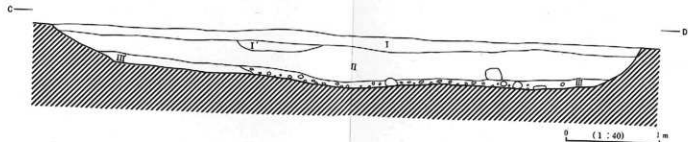
### 4 M1・2号溝状遺構（第12・13図、図版五・六の1）

M2号溝状遺構は、Y2号住居址の西方52cmに位置し、ほぼ南北に伸びる。北側は一段低い水田によって、南側は水田の畦によってそれぞれ壊されている。南北長40m、東西幅は最大で7m最少で4m、深さ56cmを測る。層序は、I・I'層が水田耕作土で、II層以下が遺構覆土である。II層は、黒色土で有機質を多く含む腐蝕土層と思われるが、溝底面に近いIII・III'層には砂の堆積





層 序  
 III層 (黒色土) 焼土炭化粒子を含む  
 IV層 (黒褐色土) 粒子細かく粘性強



層 序  
 I層 (灰褐色土) 凝結土の耕作土  
 I'層 (黒灰褐色土) I層中に黒色土層のブロック層  
 II層 (黒色土) 粒子細かく粘性中、砂、0.5m-1m程度の塊を少量含む  
 III層 (黒褐色土) 粒子粗く粘性少、砂と1cm-10cm程度の塊多量に含む  
 IV層 (褐色土) 砂層



工事中の原簿

0 10m (1:200)

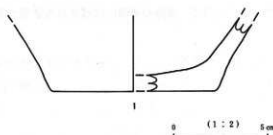
がみられ、水の流れがあったことを思わせる。

M1号溝状遺構はM2号溝状遺構の南側のプラン不明瞭な場所から溝幅4・4mで北西に24mほど伸びた後、北東に向きを変えて志賀川に臨む崖へ続く、この間46mを測り溝幅は6mほどになる。覆土は、M1号溝状遺構とは異なり溝の底面に砂層がみられなかった。

両溝状遺構とも南側から北側に、つまり、志賀川に向かって溝底面が漸次底くなっている。両端の比高は、M1号溝状遺構で約20cm、M2号溝状遺構で約70cmを測る。

出土遺物は、両遺構とも少量でほとんど磨耗しており時期等詳細は明らかでない。図示し得たのは、M1号溝状遺構の壺形土器底部片（第13図）で、底径9cmを測る。

この溝状遺構の性格であるが、まず、出土遺物からの帰属時名の決定は不可能である。表採遺物に縄文時代・古墳時代・平安時代の土器片があるが、これも時期判定資料とはなり得ない。また、同時期に調査が行なわれた樋村遺跡に北方（本遺跡）に向けて伸びる2基の溝状遺構が検出されているが、両遺跡間には、谷地が入りこんでいる。地形や相方の断面図が著しく異なっていることから同一の遺構の連続とは、とらえられない。



第13図 M1号溝状遺構出土土器実測図

## IV 総 括

上の台遺跡は、長野県営園場整備事業に係る工事進行中に確認された新発見の遺跡であった。このように、佐久市内において土木工事の際に新たに発見されたり、すでに周知されている遺跡であっても範囲がさらに拡大し規模が見直されることは、地形が段丘や微高地となっていて現在水田耕作が営まれている地目に集中してみられる。これは、畑作の場合作物や耕し方によって、遺物包含層が影響を受け易く遺物が露呈する機会が多く、水田の場合湛水されるために耕作土表面は平滑化されたり床土より下方への深耕はめったに行われないために遺物の表面採集は困難であることに起因する。水田下にあったため工事中に発見された遺跡で緊急の記録保存が行われた遺跡として、清水田遺跡<sup>(1)</sup>、井上遺跡<sup>(2)</sup>などがあり、さらに、遺跡の規模・範囲が予想外に拡大されたものとして、舞台場遺跡<sup>(3)</sup>、周防畑遺跡<sup>(4)</sup>、樋村遺跡<sup>(5)</sup>などがあげられる。いづれも多くの住居址などが検出され、出土遺物も多量なものであったが、特に樋村遺跡では315軒の住居址群が明らかとなった。

さて、本遺跡の調査は、緊急性もあって極力対象面積の縮小に努めた。園場整備事業設計者と本遺跡発見の端緒となった排水溝断面に確認できている遺構確認面の深度とを参考資料にして、遺跡の範囲内で、工事によって削平の深度が包含層に達しない部分は、調査対象地から除外することとした。そのためにのたれ松周辺と遺跡の南側に埋蔵される遺構や遺物については、明らかでない。

検出された遺構と遺物は、III章で詳述したように、弥生時代後期初頭吉田期の住居址2軒と、時代及び性格など不明確な溝状遺構2基、土壇1基であった。吉田期の住居址は、市内で調査された北西久保遺跡<sup>(6)</sup>、野馬窪遺跡<sup>(7)</sup>、樋村遺跡<sup>(8)</sup>、周防畑B遺跡<sup>(9)</sup>などがあり地形等の制約はあると思われるが、一集落の単位としては10数軒以上の住居址が考えられそうである。本遺跡としても2軒の住居址の東側一帯(台地の志賀川に臨んだ緑辺部)に土器の出土することが知られており、集落を考えた場合、かなり広範囲を想定できよう。樋村遺跡で検出された同一時期の14軒の住居址群については、その内容の詳細な分析を待たねばならないが、直線距離にして250m離れて存在すること、さらに、両遺跡間は幅約500mに及ぶ広大な面積を持つ湿地性の強い地帯が存在しており<sup>(10)</sup>、住居址が連続して存在することは考えられない。したがって、本遺跡と樋村遺跡の住居址群は、一定範囲内の同一集落とはみなしがたい。

出土した遺物は、小片で磨耗しているが、壺形土器体部の特徴、篋描鋸歯文の存在、赤色塗彩されたものが微量であること、壺形土器の文様に帯状を意識して、重複部分が少く櫛描波状文が施文されていること等弥生時代後期初頭の吉田式土器の特徴を多くもっている。該期の資料は

市新旧浅間町の西一里塚遺跡<sup>(11)</sup>、餅田遺跡<sup>(12)</sup>、清水田遺跡<sup>(13)</sup>、北西久保遺跡<sup>(14)</sup>、周防畑B遺跡<sup>(15)</sup>、旧東村の野馬窪遺跡で認められているが、旧中込町には知られていなかった。57年度に行われた本遺跡と樋村遺跡の発掘調査によってこの空白を埋めることができた。これら7遺跡の出土遺物を概観すると、次期箱清水式の要素を多分にもつ周防畑B遺跡と他の6遺跡のもつものとは、若干の相違がみられる。この両者間の相違の詳細については、北西久保遺跡、樋村遺跡の整理調査によってより明確なものとなるであろう。

本遺跡及び隣接する樋村遺跡の発掘調査は、圃場整備事業に伴う事前の緊急記録保存という性格をもったものであるが、前述した弥生時代後期初頭の旧中込町の地区で初見の資料を得たという成果とともに、樋村遺跡の第2次調査では、弥生時代から平安時代に及ぶ住居址群が315軒という空前の規模での成果が得られたことは、この地区での中世以前の実史究明への大きな手掛りをみいだしたといえよう。

最後に、この多大な成果が得られたのは、雨中泥まみれになりながらも調査に尽力された調査参加者他多くの御協力をいただいた方々のおかげであることを明記し厚く御礼を申し上げる。

## 註

- 1 佐久市大字岩村田字清水田1371地にあって、長野県教育委員会作成の佐久市遺跡分布図の範囲から若干外れていた。昭和53年12月2日に長野県公園整備事業に係る工事中重機によって削平された断面に遺物の落ち込みが露出するとともに古墳時代の土器が確認された。緊急発掘調査は昭和54年2～3月の冬場に行われ、弥生時代10軒、古墳時代3軒の住居址などが検出された。

佐久市教育委員会 1980 『清水田』 長野県佐久市岩村田字清水田遺跡発掘調査報告書

- 2 南佐久郡白田町大字三分井上193に所在する。昭和48年度白田町圃場整備事業の工事に住居址の断面が確認され井上遺跡の発見となった。緊急発掘調査は、昭和48年12月に行われ、古墳時代の住居址4軒等が検出された。

白田町教育委員会 1980 『井上遺跡』 長野県白田町緊急発掘調査報告書

- 3 佐久市大字伴野1896-1地に所在する。昭和56年度長野県圃場整備事業に係る緊急発掘調査で、昭和56年5月～同年10月に実施された。当初、畑の範囲で調査が進められていたが、進行するにつれ、住居址群が対象地外の水田にまで及んでいることが判明し、急遽調査範囲の拡張が協議された。その結果、弥生時代13軒、古墳時代10軒、奈良時代9軒、平安時代20軒、合計52軒という大住居址群が調査された。

佐久市教育委員会 1983 『舞台場』 長野県佐久市舞台場遺跡発掘調査報告書

- 4 佐久市大字兵士呂字上仲田に所在する。昭和55年度長野県圃場整備事業に先立って緊急発掘調査が行われた。遺跡の範囲は、東西500m、南北250mに及ぶことが判明したため、調査範囲は工事によって遺物が削平されてしまう範囲にとどめ、遺構確認面まで50cm以上の表土層等に覆われている地点は埋土などの処理をし現状保存とした。調査の結果は、弥生時代の住居址23軒、歴史時代の住居址18軒、その他土庫27基、円形周溝墓2基などが検出された。

佐久市教育委員会 1981 『周防畑B』 長野県佐久市大字兵士呂周防畑B遺跡発掘調査報告書

- 5 佐久市大字平賀樋村遺跡地に所在する。昭和57・58年度の2ヶ年に渡って、平賀地区圃場整備事業に先立って緊急発掘調査が行われた。従来、遺跡の範囲は、樋村の集落及びその縁部とされていたが、発掘調査の結果は予想外に大規模な遺跡であった。検出遺構は、弥生時代の住居址23軒、古墳時代から平安時代の住居址399軒という実に1へんな数である。

佐久市教育委員会 1983 長野県佐久市湯村遺跡調査報告

佐久市教育委員会 1984 長野県佐久市湯村遺跡調査報告

- 6 佐久市大字岩村田字北西久保地に所在する。昭和57年度に発掘調査された。弥生時代から平安および鎌倉時代にかけての複合遺跡である。弥生時代は、中期後半栗林期の住居址44軒、後期初頭吉田期の住居址15軒、箱清水期2軒の住居址が検出されている。調査されたのは、台地の東側1万㎡であり、木更木の西側1万㎡にもほぼ同様に遺構の存在が確認されている。

佐久市教育委員会 1980 『北西久保』 長野県佐久市岩村田北西久保遺跡発掘調査報告書

- 7 佐久市大字新子田字野馬保に所在する。昭和56年6月に信学佐久幼稚園の園舎増設に先立って緊急発掘調査がなされた。弥生時代後期初頭吉田期の住居址2軒が検出された。遺跡はさらに北方と西方へ大きな広がりを見せており、弥生時代後期から古墳・歴史時代多くの遺物が表面採集できる。また、古墳時代前期の墓台や埴形土器も既出遺物の中に見える。

佐久市教育委員会 1982 『野馬保』 長野県佐久市新子田野馬保遺跡発掘調査報告書

- 8 前掲註5

- 9 前掲註4

- 10 この谷地的低地には、青灰色の埴粘土層が1m内外の厚層をもっており、この貴重な粘土を用いて、瀬戸で江戸時代末より瓦が製造されていた。

- 11 佐久市大字岩村田字西一星塚に所在し、昭和48年10月から長野県営墓場整備に先立って緊急発掘調査された。弥生時代後期環濠集落の一部が検出された。主体は箱清水式土器だが、吉田式土器も若干みられる。

佐久市教育委員会 1973 『佐久市岩村田西一星塚遺跡発掘調査報告書』

- 12 佐久市岩村田字塚向1032地に所在し、西一星塚遺跡の南に隣接する。西一星塚遺跡

環濠と同一遺構と考えられる環状遺構が検出された。出土遺物は、弥生時代後期箱清水式土器を主体として吉田式の要素をもったものも若干みられる。

佐久市教育委員会 『岩村田新田』 佐久市岩村田新田遺跡緊急発掘調査報告書

- 13 前掲註1

弥生時代住居址10軒の内訳は、中期栗林期1軒、後期吉田期1軒、後期箱清水期8軒であった。

- 14 前掲註6

- 15 前掲註4

弥生時代住居址23軒は、吉田期の様相を留るものの次期箱清水期の色濃い土器を出土している。

#### 引用参考文献

笹沢 浩 1970 「箱清水式土器の再検討」 信濃22—4

笹沢 浩 1977 「入門講座・弥生土器—中部高地3」 考古学ジャーナル134

笹沢 浩 1978 「中部高地型柳橋文の系譜」 中部高地の考古学

千曲川水系古代文化研究所 1980 『編年』

白田真正 1980 「佐久地方の後期弥生式土器について」 信濃32—4

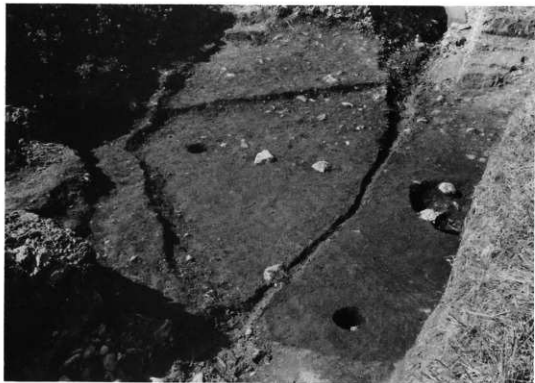




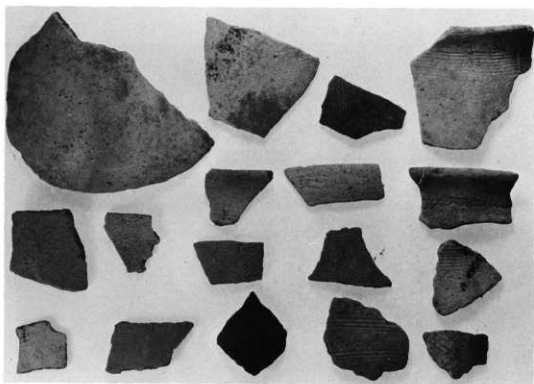
1 上の台遺跡近景（西から）



2 Y1号住居址全景（北西から）



1 Y1号住居址全景 (南東から)

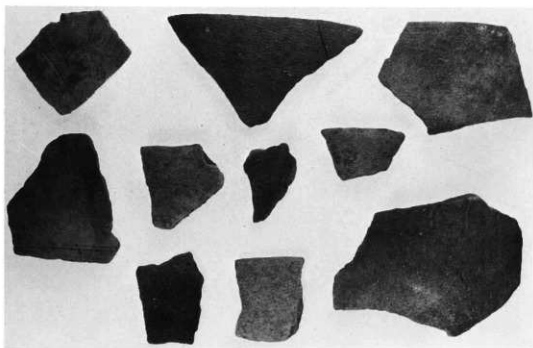


2 Y1号住居址出土遺物





1 Y2号住居址全景(北西から)



2 Y2号住居址出土遺物



1 Y1号住居址出土石器



2 M1号溝状遺構全景 (東から)



3 M1号溝状遺構全景 (南から)



4 M2号溝状遺構全景 (東から)



1 M2号溝状遺構全景 (南から)



2 発掘調査団

長野県佐久市上の台遺跡発掘調査報告書

昭和59年3月発行

編集者 上の台遺跡発掘調査団

発行者 佐久市教育委員会

印刷所 株式会社佐久印刷所